

博士論文要旨

「中世神話」としての牛頭天王 ——牛頭天王信仰に関するテキストの研究——

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

スズキ コウタロウ

氏名 鈴木 耕太郎

本論は、牛頭天王信仰に関するテキストを「中世神話」という視座を用いて読解し、そこから浮かび上がる牛頭天王の信仰世界を検討することが主たる目的である。

本論は四章からなっており、第一章「牛頭天王信仰の研究史と本論の課題——信仰世界を見るための視座と方法」では、これまでの神仏習合論や本地垂迹説を前提としたような先行研究では、牛頭天王への信仰世界を顕わにすることはできないことを示した。それは、近代主義的な価値観や学問知では、牛頭天王信仰に関するテキストを読解できないということを意味する。そのため、近代主義的な価値観では顧みられてこなかった中世期の『日本書紀』注釈書ならびにその言説に、中世特有の知を見出した「中世日本紀」という視座を確認し、近代主義的な価値観や学問知からの脱却が必要であることを示した。そして、その「中世日本紀」をうけて成立した「中世神話」という視座が、本論におけるテキストの読解に有用であることを確認し、むしろ「中世神話」の視座でなければ牛頭天王信仰に関するテキストも読解できないこと、すなわち牛頭天王への信仰世界は浮かび上がってこないことを示した。その上で、この牛頭天王の出現、すなわち「中世神話」として捉えることのできるテキストの創造こそが「中世」の象徴でもあることを示した。すなわち、本論で明らかにする牛頭天王とは「中世神話」としての牛頭天王に他ならないことを明らかにした。

第二章は「祇園社祭神の変貌——ト部兼文・一条兼良・吉田兼俱の言説をめぐって」と題し、牛頭天王への信仰世界を捉える上で非常に重要な意味を持つ祇園社の祭神に関する『新日本紀』におけるト部兼文の祇園社祭神言説、『公事根源』ならびに『日本書紀纂疏』における一条兼良の祇園社祭神言説、『神書聞塵』における吉田兼俱の祇園社祭神言説をそれぞれ検討した。その結果、兼文により祇園社祭神とスサノヲとが結び付けられ、兼良は祇園社祭神である牛頭天王とスサノヲとを結び付け、さらに兼俱は、祇園社祭神である牛頭天王だけでなく、すべての異国神はすべからくスサノヲである、との言説を展開したことがわかった。すなわち、兼文の知を兼良が、兼良の知を兼俱が乗り越え、新たな知、言説を構築したことを意味する。それは、彼ら個人の突出した営為であると同時に、既存の秩序や価値観の崩壊と共に、新たな秩序や価値観を求める社会に要請された、とも見られることを明らかにした。つまりそれは、彼らの言説により変貌を見せる祇園社祭神も、時代の転換を象徴しているということでもあつ

た。

第三章は「「感応」する牛頭天王——『阿婆縛抄』所収「感応寺縁起」を読む」と題し、これまでの先行研究では簡単に触れられるのみに留まっていた『阿婆縛抄』所収の「感応寺縁起」を「中世神話」の視座を用いて読解、検討した。まずこの縁起の牛頭天王は、祇園社祭神に代表される異国神であり、行疫神かつ除疫、防疫神である牛頭天王とは異なることを確認した。その上で、感応寺本尊である観音の利益を包含するような、ある種の万能神的な神として描かれていることを明らかにした。そしてその背景には、天台密教における牛頭天王と観音との習合言説の影響を受けている可能性を指摘した。さらに、この縁起から感応寺の鎮守社である川前天神堂における儀礼が浮かび上がることを明らかにした。また、この縁起には、「宗教実践者」である感応寺開祖の老演と、老翁神との交渉が如実に見られ、両者が交渉を通して「成長」していく様子を明らかにした。すなわち、老演と牛頭天王は「感応」関係にあり、そこには神人合一ともいえる関係性が見えるのである。しかし、時代が降り『元亨釈書』の時代になると、『阿婆縛抄』に見られた「感応寺縁起」とはまったく異なる「感応寺縁起」へとテキストが変貌する。『元亨釈書』の「感応寺縁起」からは、端午における悪気・毒気の発生源としての牛頭天王の姿が顕わとなるが、その牛頭天王も、自らの意思で広めるのではなく、「衆生の業感」次第だとする。ここには祭祀の対象としての牛頭天王は見られない。さらに『壺囊鈔』所収の「感応寺縁起」になると、「川崎の鎮守は是祇園」と、感応寺の伽藍神たる牛頭天王が、祇園社祭神としての牛頭天王へと収斂していく様子が見られることを確認した。これは感応寺における牛頭天王の変貌であると同時に、「感応寺縁起」の変貌ともいえることを示した。

本論最後の章となる第四章「『牛頭天王御縁起』（「文明本」）の信仰世界——『篋篋内伝』との比較を通して」では、「祇園縁起」と称されるテキスト群の中でも最古の書写年代を有す『牛頭天王御縁起』（「文明本」）を、「中世神話」の視座を用いて読解し、またすでに共通点が指摘されている『篋篋内伝』との比較を行うことで、この縁起から顕われる信仰世界について検討した。この縁起の牛頭天王信仰については、すでに年神信仰の取り込みが先行研究で指摘されている。しかし、縁起全編を通して読解すると、従来の儀礼から最先端の信仰、すなわち牛頭天王信仰への転換が説かれていること、この縁起における牛頭天王への儀礼とは、いわゆるオコナイとよばれる正月行事であり、しかしその起源や意義がすべて牛頭天王信仰に即して語り直され、造り替えられていること、また蘇民の子孫たる衆生は古端への呪咀を行うことで利益が得られること、そしてこの縁起における牛頭天王が、祇園社祭神における行疫神かつ除疫、防疫神とは異なることを示した。それはこの縁起が京の祇園社のような都市で作成されたものではなく、恐らくは地方集落で作成されたこと、また集落における営為が神との誓約として位置づけられていることを明らかにした。また、この縁起が祭文として用いられたことも示し、テキストの変貌が見られることを述べた。

本論における上記の成果は、これまで日本の宗教史上に明確には位置づけられてこなかった牛頭天王信仰を位置づけ可能とするものである。

Abstract of Doctoral Thesis

Gozu Tenno from the perspective of "Medieval Mythology" : A textual research on the worship of Gozu Tenno

Doctoral Program: Major in Humanities
Graduate School of Letters
Ritsumeikan University

スズキ コウタロウ
SUZUKI Kotaro

This thesis explores the worship of Gozu Tenno from the Medieval to the Pre-Modern period through the analysis of texts such as *engi* and *saimon*.

"Medieval Mythology" is a critical stance that views *engi* and *saimon* created in the Medieval period as mythology. By adopting this stance, we can see that the portrayal of Gozu Tenno in each of these texts differs greatly. This thesis seeks to explore the importance of Gozu Tenno's "transformation".

Chapter one will focus on a critical analysis of previous research and on the significance of a new approach.

Chapter two will analyze the transformation of Gozu Tenno as enshrined deity of Gion Shrine during the Medieval Period through the *Shaku Nihongi*, a text by Urabe Kanekata based on the records of lectures on the *Nihonshoki* by his father Urabe Kanefumi, and through the *Kuji Kongen* and *Nihonshoki Sanso* compiled by Ichijo Kaneyoshi. This transformation is strongly linked to the "secret interpretation" of the *Nihonshoki* transmitted within the Urabe clan.

Chapter three will explore the worship of Gozu Tenno as seen in the *Kannoji Engi*, a narrative contained in the Tendai Buddhist ritual manual *Asabasho*. There, Gozu Tenno encompasses the benefits of Kannon, principal deity of Kannoji Temple. This chapter will also analyze how the ritual dimension of this deity emerges from the narrative text.

Chapter four will analyze the local worship of Gozu Tenno through the *Gozu Tenno Goengi* dating from 1482. It is unclear where this narrative was created, however, its portrayal of Gozu Tenno as encompassing the cult of *toshigami* clearly differs from that seen in Gion Shrine.

Finally, this thesis will clarify why the period in which several different cults of Gozu Tenno were born can be called "Medieval".